

# 水染みの『いんふお』

## — 原発事故被災店舗のアーカイブズ —

西 村 慎太郎

### 【要 旨】

本稿は東京電力福島第一原子力発電所事故で被災した福島県浪江町の店舗のアーカイブズの階層構造を分析するとともに、その利活用をどのように展開できるか検討するものである。具体的には、町域の多くが原発事故のために帰還困難区域を抱える福島県双葉郡浪江町で料理店を営んでいた日本料理「しのはら」資料を事例とする。日本料理「しのはら」資料は全202レコードで半分は地域情報誌（ミニコミ誌）の端本であった。これらをアイテムレベルで一点ごとに検証すると、原発事故で店舗にそのまま遺されていた資料と事務所空間に遺されていた資料の劣化の違いがあり、改めて目録編成を行った上で、原発事故を語ることができる資料群として捉え直し得た。

それらの点を発見することができたのは日本料理「しのはら」の女将からの聞き取り調査であり、聞き取り調査が資料群のコンテクストを把握できる重要な作業であることを明らかにした。そして、このような資料自治体などの資料収蔵機関において積極的に保全する意義が求められるので、日本料理「しのはら」資料を「生活誌」再現とともに原発事故を語ることができる資料として位置づけた。

### 【目 次】

はじめに

1. 福島県双葉郡浪江町と日本料理「しのはら」の概要
2. 日本料理「しのはら」資料の整理と構造
3. 日本料理「しのはら」資料の階層構造模索
4. 「生活誌」としての日本料理「しのはら」資料

おわりに

## はじめに

本稿は東京電力福島第一原子力発電所事故（以下、原発事故）で被災した福島県浪江町の店舗のアーカイブズの階層構造を分析するとともに、その利活用をどのように展開できるか検討するものである。

原発事故に関わるアーカイブズの問題として、最初に報道されたものは2011年末に日本政府の原子力災害対策本部・電力需給に関する検討会合などにおいて議事録及び議事概要の作成が成されていなかった、あるいは不十分であった点であろう。この問題を重く受け止めた政府は2012年4月25日付けで『東日本大震災に対応するために設置された会議等の議事内容の記録の未作成事案についての原因分析及び改善策 取りまとめ』を内閣府公文書管理委員会名で発表し、原因分析と改善策が提示している<sup>1)</sup>。

また、原発事故発生から10年を経た2021年には被災自治体における公文書の保管に関する問題が浮上し、例えば、大熊町では保存年限にかかわらず2010年・2011年の公文書を永年保存とすることにしたと報道された<sup>2)</sup>。しかし、原発事故に伴う補償・避難・生活支援・一時立ち入り・除染・健康管理は現在までも（そして数十年先までも）続いており、これらの公文書の保管については目途が立っていない。国にせよ、自治体にせよ、原発事故のアーカイブズをどのように作成、保管、利活用するか、重要な課題があるといえよう。

一方で、住民の視点に立った場合、アーカイブズやアーカイブズ学は公文書以外の課題もある。慣れ親しんだ土地からの避難を余儀なくされ、それまでの生活やコミュニティ、場合によっては家族をもバラバラにされた住民はいかに安定した生活を送ることができるか、そして、そのような課題に対して、アーカイブズ学に何ができるか。「創造的復興」は地域コミュニティ再生に結び付いていない、あるいは分断を生んでいるという問題の糸口をアーカイブズ学の視点からいかに見出すことができるかという問いである。

その際、地域住民の生活に根差したアーカイブズを継承し、利活用できるようにし、さらには地域コミュニティ再生を推進することで、この問いの一端に答えることができるであろう。実際、原発事故被災地域の地域コミュニティ再生という課題の解決策のひとつとして、歴史や文化の継承が挙げられている。浪江町に隣接する双葉町の場合、『双葉町復興まちづくり計画（第二次）』など復興計画の初発段階から現在に至るまで「双葉町の歴史・伝統・文化の記録と伝承」を柱に掲げている<sup>3)</sup>。双葉町の南に位置する大熊町の場合、『大熊町第二次復興計画改訂版』などにおいて「大熊のDNAを残し、新しい文化を紡ぐため」「ふるさとの歴史を伝えるための記録の保管と活用」を重点施策に掲げている<sup>4)</sup>。地域の文化財行政にとっても重要な提言であ

1) 公文書管理委員会『東日本大震災に対応するために設置された会議等の議事内容の記録の未作成事案についての原因分析及び改善策 取りまとめ』（<https://www8.cao.go.jp/koubuniinkai/iinkaisai/2012/20120425/20120425torimatome.pdf>。2023年8月24日閲覧）。

2) 「福島民友」2021年10月10日付（<https://www.minyu-net.com/news/sinsai/serial/1007/FM20211010-660653.php>。2023年8月24日閲覧）。なお、大熊町の2010年・2011年の公文書は「永年保存」であるため、報道された段階ではアーカイブズ施設の設置と移管を目指していたが、2023年段階では社会教育複合施設建設にシフトしているため、これら公文書がどのような扱いになるかが注目されよう（『大熊町社会教育複合施設基本構想』大熊町教育総務課、2023年）。

3) 『双葉町復興まちづくり計画（第二次）』（双葉町復興推進課、2016年）17頁。

4) 『大熊町第二次復興計画改訂版』（大熊町企画調整課、2019年）51頁。

るが、筆者はより地域住民の日常生活に寄り添った「生活誌」的な要素を構築するアーカイブズに着目してみたい。これらは既述の復興計画はもとより、従来の文化財行政、改正文化財保護法に伴う「文化財保存活用大綱」からも抜け落ちている視角だからだ<sup>5)</sup>。

このような「日常生活に寄り添った」という視角は民俗学や社会学の領域である。また、現実的な課題を内包するとしたら歴史社会学の範疇として捉えられるかもしれない<sup>6)</sup>。しかし、アーカイブズ学が領域も分野も業態も問わない基礎学問であることを踏まえれば、歴史学者である筆者が、民俗学や社会学、歴史社会学に学びつつ、住民生活に根差したアーカイブズを論じることは十分に可能であろう。また、近年、筆者は大字誌という視角で大字レベルの生活・文化・歴史を明らかにする試みを原発事故被災地で進めており、どのように「生活誌」を叙述し得るかの模索をしている<sup>7)</sup>。

そこで本稿では、福島県浪江町の店舗のアーカイブズを事例として、アーカイブズ学における目録編成の可能性を示すとともに、利活用的一端として「生活誌」への言及の可能性について述べてみたい。

## 1. 福島県双葉郡浪江町と日本料理「しのはら」の概要

最初に浪江町の概要を述べたい<sup>8)</sup>。

福島県の浜通り地方に位置する双葉郡浪江町は、東は太平洋、西は阿武隈高地まで広がる自治体である。原発事故以前、2010年の人口は20,905人であった。町の玄関口であるJR常磐線浪江駅には上野―原ノ町・仙台間を走る特急スーパーひたち号6往復がすべて停車した<sup>9)</sup>。さらに、東京―仙台を結ぶ国道6号線と福島市内を結ぶ国道114号線が交わる交通の要衝である。

そもそもJR浪江駅のある大字権現堂という地域には江戸―仙台を結ぶ「陸前浜街道」が東西に走っており、高野宿（こうや・たかや・たかの）が設置されていた（のちに浪江宿と改称）。沿岸部の請戸湊は東廻り航路の寄港地で、鉄道敷設後は鰹漁や鰹節生産が盛んとなり、西側の山地は材木生産・材木加工が行われた。相馬藩御用窯以来の大堀相馬焼は原発事故直前まで浪江町の最も重要な製造業であった。

---

5) 一方で、福島県文化財保存活用大綱の「市町村別の特色ある関連文化財群」において、大熊町は「東日本大震災と原発事故による生活環境の移り変わり」とタイトルを付けて、文化財の中に「震災・原発事故関連アーカイブズ資料群」を含みこんでおり、注目に値しよう。

(<https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/377584.pdf>。2023年9月14日閲覧)。

6) 近年の歴史社会学については、赤川学・祐成保志編著『社会の読解力〈歴史編〉 現在せざるものへの経路』（新曜社、2022年）。

7) 大字誌については、拙編『地域住民と共有する歴史と文化―大字誌の地平―』（人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト 国文学研究資料館ユニット「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」、2023年）。

8) 『浪江町勢要覧』（浪江町、2002年）、『浪江町復興ビジョン』（浪江町、2012年。<https://www.town.namie.fukushima.jp/uploaded/attachment/68.pdf>。2023年7月15日閲覧）、『浪江町復興計画【第三次】』（浪江町、2021年。<https://www.town.namie.fukushima.jp/uploaded/attachment/13894.pdf>。2023年7月15日閲覧）。

9) 「浪江駅発列車時刻表 平成23年3月12日JR東日本ダイヤ改正版」（有限会社双葉クリエイト、2011年）。

原発事故以前の『町勢要覧』から浪江町の産業について確認しておこう<sup>10)</sup>。産業別就業者数としては、第1次産業1,621人（14.1%）、第2次産業4,725人（41.2%）、第3次産業5,123人（44.7%）である。私有地地目構成は田が1,989ha（23.4%）であるのに対して、西側の山地を中心とした山林が4,062ha（47.8%）に及んでいる。近世には津島地域の材木が藩の御用に使用され、近代以降は建築資材とともに良質な薪や炭を生産していた。大正5年（1916）における浪江駅の年間輸送貨物のうち、材木は11,678トン、木炭は3,212トンであった<sup>11)</sup>。また、窯業に従事していたのは469人と製造業では最も多い（14.9%）。このように浪江町は建設業・製造業に従事する町民が多かった。

次に原発事故以降の浪江町の様相について、2023年12月までの浪江町の様相を見てみよう。

2011年3月11日午後2時46分に宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmでマグニチュード9.0の地震が発生した。浪江町では震度6強を計測している。午後3時30分頃、東京電力福島第一原子力発電所に津波が到達し、午後4時45分、津波のため原発の電源が喪失した旨の連絡が日本政府に入り、午後7時3分、原子力緊急事態宣言が菅直人内閣総理大臣によって発出された。翌3月12日午前5時44分、第一原発半径10km圏内の避難指示が政府によって発出された。これは浪江町の中心部である大字権現堂や役場がある大字幾世橋が該当するものの、政府や東京電力から町役場への連絡は全くなく、町は独自に町民の避難誘導を始めたとき当時の馬場有町長は述べている<sup>12)</sup>。そして、同日午後3時36分に第一原発1号機が水素爆発を起こし、その後、3号機・4号機の水素爆発、2号機の格納容器損壊などの原因によって大量の放射性物質が放出された。放射性物質は浪江町域に降り注ぎ、大字津島に避難していた多くの町民が被ばくした。さらなる被害拡大を恐れた町は3月15日午前4時30分、独自に町外への避難決定し、二本松市内に町の災害対策本部と避難所を開設した。4月22日に20km圏内が警戒区域・計画的避難区域に設定され、2年後の2013年4月1日に警戒区域が再編されて、避難指示解除準備区域・居住制限区域・帰還困難区域が設定された。避難指示解除準備区域とは、年間積算線量が20mSv以下になることが確認され、住民帰還を準備する区域。居住制限区域とは、年間積算線量が20mSvを超える危険があるため、引き続き避難を継続する区域。帰還困難区域とは、年間積算線量が50mSvを超えて、5年間経ても年間積算線量が20mSvを下回らない危険がある区域のことである。

そして、「復興五輪」の可視化のため、国家権力は原子力緊急事態宣言の解除をしないまま、2017年3月31日に浪江町の中心部と沿岸部のみ避難指示解除準備区域・居住制限区域の避難指示を解除した。しかし、浪江町域の81%は2023年3月31日現在でも帰還困難区域となっている。なお、2022年9月1日には帰還困難区域のうち特定復興再生拠点の準備宿泊が開始された。

次に本稿で取り上げる日本料理「しのはら」について概略を記したい<sup>13)</sup>。

日本料理「しのはら」は浪江町大字西台字下川原98に1996年12月にオープンした料理店である。JR常磐線浪江駅から徒歩10分ほどの泉田川左岸に位置する。オーナーは板前修業の過程で後に女将となる篠原美陽子氏と結婚、同年、日本料理「しのはら」を開業した。では、どの

10) 前掲註8『浪江町勢要覧』。

11) 石井清巳『現今之浪江町』（石井清巳、1918年）28頁。

12) 三浦英之『白い土地 ルポ福島「帰還困難区域」とその周辺』（集英社、2020年）109頁～113頁。

13) 日本料理「しのはら」については、女将である篠原美陽子氏の聞き取りに基づいている。

ような特色を持った料理店であったか、書籍に掲載された紹介記事から検証してみよう<sup>14)</sup>。写真には3,500円の湯葉御膳を掲載した上で、リード文として「雑多から解き放たれる贅沢空間」とあり、以下のように記されている。

高級料亭を思わせるような店内、ゆったりとした空間の演出が心を和ませしてくれる。繊細な料理の数々は、日本料理の粋を極めたものばかり。大小7つの個室があるので、大事な接待や、大切なおもてなしにはぴったり。「御食事膳」なら料金も2,000円とお手頃。ランチタイムには、1,000円から2,000円の限定メニューも設定されているので、気軽に訪れてみよう。

右脇のメニューガイドには、「すっぽんコース7,000円～」、「かに料理（2・3月）5,000円～」、「ふぐコース（10～3月）8,000円～」、「京懐石6,000円～」と見える。営業時間は11時30分から13時30分、17時から21時に設定されているが、客の希望や都合によっては臨機応変に対応していたようで、昼は14時、夜は22時くらいまで営業したり、昼の部の後のインターバルがないこともあったようである。実際に毎週日曜日を定休日としているが、予約があれば営業していた。駐車場は15台が停められ、客層の内訳は、フロアに立っていた美陽子氏の印象では東京電力関係6割、浪江町民3割、その他1割であった。紹介記事にもあるように、個室があったことから「大事な接待や、大切なおもてなし」に用いられたのであろう。

原子力災害によって、日本料理「しのはら」は、営業はおろか立ち入りも制限されてしまった。2017年3月31日には日本料理「しのはら」のある浪江町西台地区は避難指示から解除されたものの、自宅の小丸地区は帰還困難区域のままであり、営業再開の見通しが立たないことから2022年3月に取り壊されることとなった。

## 2. 日本料理「しのはら」資料の整理と構造

ここでは日本料理「しのはら」の資料整理の過程とその資料群の構造について論じたい。

日本料理「しのはら」の女将である篠原美陽子氏より2022年3月2日に筆者へメッセージでの連絡が届いた。美陽子氏は原発事故のために避難生活を強いられている人びとに対して、『想い』と称された地域情報誌（ミニコミ誌）を発行しており、筆者はFacebookで知り合っていた。そのメッセージの内容とは、日本料理「しのはら」の店舗を解体するため、原発事故以前よりそのまま店舗に遺されていた「新聞や広告」類が研究のために必要かという問い合わせであった。

貴重な資料であることは間違いないので、一括で受け取ることを伝え、同年3月31日に段ボール2箱が届いた。篠原氏よりは「一応、放射性物質は付いています」という連絡を受けたので、線量を測定したが90cpm～180cpmの間であり、特に問題はなかった。後述するように事務空間にまとめられていた資料と店舗空間に遺されていた資料とでは、後者の場合、水濡れなども確認できたため、線量に違いが出るものと思われたが、ここでは大きな差が確認できなかったため、通常の資料整理と同じように簡易なドライクリーニングをするのみで、目録作成に取り

---

14) 日本料理「しのはら」資料1-22。書名不明の書籍251頁目の切り抜きであり、左端に画鋏痕、全体に水染みが確認できる。篠原美陽子氏からの聞き取りによると、更衣室に貼られていた切り抜きである。

組んだ。

ドライクリーニングをする過程で、おそらく店舗空間に遺されていたと目される資料については若干の埃が付着していたり、水染みがあった。また、鼠損も確認できる資料が1点あった。原発事故後、人がいなくなったことによって外部より侵入したのであろう。

次に日本料理「しのはら」の資料の整理方法について述べたい。既述の通り、日本料理「しのはら」の資料の2箱であり、箱の上部から下へと資料が重なっている状態であった。当初、基本的にはこの現状を活かしつつ、一点ごとの目録作成を進めるという計画を立てた。目録の項目は資料番号・表題及び内容・年代・作成者（出版社）・形態・数量・備考である。目録作業中に手紙・FAXなどがあったため、宛名も項目として加えた。

日本料理「しのはら」資料は全202レコードである。そのうち半分に当たる102レコードが地域情報誌（ミニコミ誌）であった。地域情報誌（ミニコミ誌）については巻号順に並べた方がよいと判断したため、現状を活かすことはせずに、各地域情報誌（ミニコミ誌）の巻号順に並べ変えて目録作成を行った。しかし、巻号順に並べ変えて目録作成を進めたことはあとで大きな過ちであったことに気が付くのだが、それについては次節で述べたい。

では、日本料理「しのはら」資料の編成について述べてみたい。図1は日本料理「しのはら」資料の階層構造を示したものである。サブフォンド（大項目）として「日本料理「しのはら」と「商工会」を設定した。サブフォンド「商工会」については、篠原美陽子氏が浪江町商工会女性部において常任委員を務めるなど<sup>15)</sup>、商工会の活動にも参画していたため、浪江町商工会関連の資料がまとまっており、サブフォンド（大項目）とした。

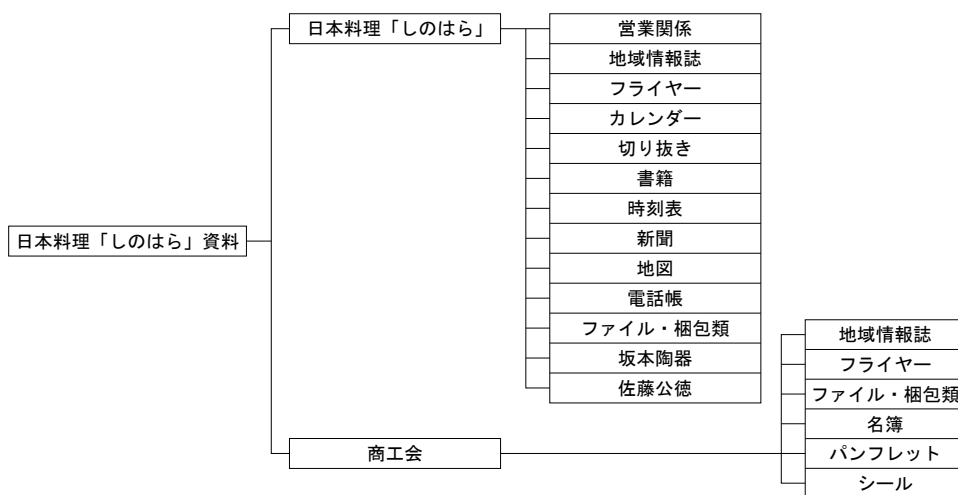


図1 日本料理「しのはら」資料の階層構造

サブフォンド「日本料理「しのはら」」は13のシリーズ（中項目）に編成した。点数が少ないため、細かく設定する必要はないと思われるが、資料群の特徴を提示することを目指すことを試みた。この点、書籍・時刻表・新聞をひとつにまとめることが可能かもしれない。また、シリーズ「佐

15) 「女性部役員名簿」（日本料理「しのはら」資料1-58）。

藤公德」を設定したが、佐藤公德氏とは、南相馬市小高区の写真家で、『小さな村の小さな写真集かつらお』や写真類が日本料理「しのはら」資料に含まれている。これらも書籍・時刻表・新聞と合わせることもできるが、佐藤公德氏の写真が店内に飾られていたという情報を得たため、この資料群の特徴と考え、敢えてひとつのシリーズとした。そのため細かい編成であることは承知しつつ、書籍・時刻表・新聞については別に設定した。同様にシリーズ「坂本陶器店」もフライヤーなどと合わせることもできる。坂本陶器店とは、大堀相馬焼の窯元であり、オーナーの同級生の店舗であったので、これも特徴と捉え、シリーズに設定した。

ところで、シリーズ「佐藤公德」・シリーズ「坂本陶器店」を除くと、様々な場所で広く見られる店舗や事業所のアーカイブズと同様と評価することになるかもしれない。さらに日本料理「しのはら」経営関係の資料はほとんど遺されていないので、経営史研究や経営研究への利活用もできない。自治体などの資料収蔵機関において、日本料理「しのはら」資料を積極的に保全する意義が求められるかもしれない。そこで、先に提示した図1の編成とは別に、原発事故に被災した資料群という視角で日本料理「しのはら」資料の編成を行ったのが、図2である。ここではサブフォンド（大項目）を「日本料理「しのはら」」「商工会」以外に「被災資料」「被災後資料」の4つを設定した。この図2の編成については節を改めて詳述したい。

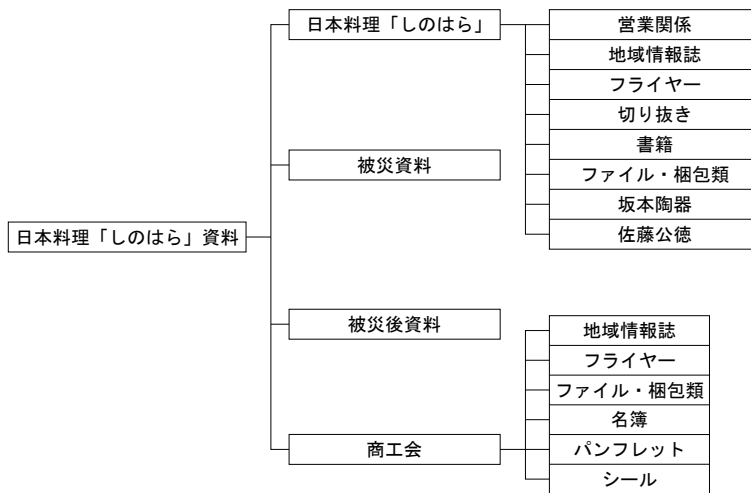


図2 原発事故被災資料群という視角からみた日本料理「しのはら」資料の階層構造

### 3. 日本料理「しのはら」資料の階層構造模索

では、日本料理「しのはら」資料の階層構造のうち、図2をどのように構築したか。図2の作成過程については、図1を作成した後に篠原美陽子氏への聞き取り調査とそこから導き出された発見があった。ここでは階層構造の模索をどのように行ったのか、また、その着眼点を述べてみたい。

日本料理「しのはら」資料全202レコードの目録編成を終了した段階で、女将である篠原美陽子氏への聞き取り調査を行った。主に日本料理「しのはら」資料がどこにどのように保管されていたのか、営業をしていた時期にこれらの資料をどのように保管していたのか、何故地域

情報誌（ミニコミ誌）が多いのかなどである。聞き取り調査は時間の制限もあって1時間程度であり、その後はメールによって確認をした。

その結果、筆者に送られてきた段ボール2箱の中でも、もともとの保管先が店舗空間や事務所空間など異なる場所の資料を一括して収納していたことが判明した。既述のとおり、最も大量の資料である地域情報誌（ミニコミ誌）を巻号順に並べ替えて整理作業を行ってしまったが、これによって原状を復元できる要素を逸してしまったのである。周知のとおり、資料整理の場合、現状記録調査ないしは概要調査を行った上で、一点ごと（アイテムレベル）の把握を行い、目録を作成する<sup>16)</sup>。印刷物であり、最近の地域情報誌（ミニコミ誌）であるからといって、この作業を怠り、むしろ巻号順に並べ替えたことで利活用しやすいと思った点は失敗であった。しかし、聞き取り調査によって複数の場所で保管されているという事実が判明したことで、日本料理「しのはら」資料は図2のような階層構造を構築する視角を得ることができた。

この点を述べるに当たって日本料理「しのはら」資料の地域情報誌（ミニコミ誌）の特質について見てみたい。

日本料理「しのはら」資料の地域情報誌（ミニコミ誌）は17種類102レコードある。これらはバックナンバーが揃っているわけではなく、全種類端本だ。では、なぜこれら地域情報誌（ミニコミ誌）が遺されていたか、女将である篠原美陽子氏は2点のことを教えてくれた。第1に、『いんふお』（株式会社ジョブエクスプレス、のちに株式会社いんふお。）と『SUMUSUMU』（有限会社双葉不動産）は出版元の関係者が顧客であり、設置を依頼されたことによる。第2に、『いんふお』をはじめとして、そのほかの地域情報誌（ミニコミ誌）には飲食店の情報が掲載されており、日本料理「しのはら」の経営に役立てるためであった。例えば、『いんふお』とは、2004年2月から発行している福島県相双地域のフリーペーパーであるが、日本料理「しのはら」に遺された最も古い『いんふお』第7号の「生活のちょこっと」のコーナーには料理レシピあり、そのレシピ提供は浪江町大字西台字川原のブレッドハウスであった<sup>17)</sup>。また、第17号の特集は「酒を愉しむ」、第21号の特集は「ランチ&ディナー プチ忘年会特集」である。このように遺された端本は飲食店に関わる記事が散見され、篠原美陽子氏による評価・選別の意思が垣間見えよう。この点、聞き取り調査を実施していなかったならば、地域情報誌（ミニコミ誌）の単なる端本のまとまりとして考えられてしまい、遺された端本の意味が見出し得ない。聞き取り調査によってアーカイブズのコンテクストを浮かび上がらせることができたわけである。

さて、既述のとおり、端本であるからこそ、まずは巻号順に並べ替えをしてしまったわけだが、目録を作成している過程で、『いんふお』のうち、第85号だけに水染みが確認できた。それは、2011年3月号（2011年2月25日発行）の『いんふお』で、特集は「大人女子歓送迎会スペシャル」である。当初はこの水染みについて特に考慮せず、目録の「備考」欄に「水染みあり」と記す程度であったが、のちに改めて篠原美陽子氏に確認したところ、店舗空間の地域情報誌（ミニコミ誌）やフライヤーが設置されているところに置かれていたものであるとのことが判明した。店舗空間に置かれていたため、何らかの水濡れが生じて、染みになっており、同様の染みは

16) 拙稿「概要調査・現状記録再考—民間所在資料保存のために—」（『国文学研究資料館紀要』9、2013年）、富善一敏「現状記録と概要調査 ささやかな個人的体験から」（『東京大学経済学部資料室年報』13、2023年）ほか。

17) 『いんふお』第7号（2004年8月号）8頁。



他の資料でも確認できた。つまり、同じ『いんふお』のバックナンバーではあるが、事務所空間に飲食店の参考として保管されていたものはダメージを受けることなく、一方で、『いんふお』第85号は原発事故で避難を余儀なくされる直前であるため、店舗空間にそのまま遺され、水分によって染みとなったわけである。

『いんふお』第85号のように店舗空間に遺されていたと目される資料で水染みや汚損が確認できるものは多い。当初の目録では、アイテムレベルでの内容によって、図1のように2つのサブフォンドに編成したが、前述のように、原発事故の避難のために遺され、劣化したという意味は日本料理「しのはら」の資料群にとって非常に重要であると思われ、図2のような「被災資料」「被災後資料」というサブフォンドを新たに設定した。これによって、日本料理「しのはら」資料は、一店舗に蓄積されたアーカイブズという意味だけでなく、原発事故被災地の店舗に遺されて原発事故を語ることができるアーカイブズという意味を持つことになる。これはアイテムレベルで、内容だけでなく、周辺情報（コンテキストと言い換え得る）を把握しないと構築し得ない目録編成といえよう<sup>18)</sup>。

そして、『いんふお』第85号のような水染みは触ったり、肉眼であるとその痕跡が確認できるが、デジタル画像だと判然としない。当然ながら紙は水を吸収すると膨張し、乾燥すると収縮して収縮する。この伸縮によって紙は波打った形状になるが、それを撮影して写真・画像にしても判然としない。この原発事故の痕跡はデジタル・アーカイブ、デジタル・ミュージアムでは不向きである。

#### 4. 「生活誌」としての日本料理「しのはら」資料

では、日本料理「しのはら」資料は原発事故被災地の店舗に遺されて原発事故を語ることができるアーカイブズという以外にどのような利活用が可能であるか。これは日本料理「しのはら」資料だけの問題ではなく、地域情報誌（ミニコミ誌）の利活用という視角に関わる。冒頭でも述べたように、政府による「創造的復興」の政策は地域コミュニティ再生に結び付いていないか、分断を生んでいると指摘されている。このような状況下で、アーカイブズ学は、公文書はもちろんのことながら、地域住民の生活に根差したアーカイブズを継承すること、そこからコミュニティの再生に結び付けることを目指すことができるのではなかろうか。コミュニティの再生には、たしかに歴史・文化のような視角も重要であり、自治体の文化財行政の役割が不可欠であるが、住民生活の基盤となっている「思い出」のようなものが大きな意味を持つ。その点で地域情報誌（ミニコミ誌）は「思い出」を呼び覚ますツールであるし、原発事故以前の様相を明示する資料であるといえよう<sup>19)</sup>。それを民俗学や歴史社会学で用いられる「生活誌」という表現で述べていきたい。この地域情報誌（ミニコミ誌）は「生活誌」を構築する一助に

18) 展示を行う学芸員に蓄積されている物語構築の視角に近いものと思われる。筆者の発想は福島県双葉郡富岡町の「とみおかアーカイブ・ミュージアム」の門馬健学芸員のギャラリートークより着想を得た。

19) このような着想は、大門正克「高田の保育」が映し出す「子どもの世界」・河西英通「地域の姿を記憶・記録する―多様な試み」（いずれも大門正克・岡田知弘・川内淳史・河西英通・高岡裕之編『「生存」の歴史をつなぐ』續文堂出版、2023年）による。

なるアーカイブズだ。

日本料理「しのはら」資料で最も多い地域情報誌（ミニコミ誌）は『いんふお』である。これは相双地域の情報誌であり、遠くは宮城県亶理郡亶理町にも設置されている<sup>20)</sup>。県内の図書館では、福島県立図書館において、vol.38（2007年4月号）以降は所蔵しているが、相双地域で最大級の蔵書を誇る南相馬市立図書館では1点しか所蔵していない<sup>21)</sup>。『いんふお』vol.14（2005年3月25日号）の読者から寄せられた情報掲載コーナー「かわらVAN」によれば、川俣町在住の主婦が「川俣には、こういった情報誌が無いので、浪江町等へ遊びに行った時、欠かさずもらってきて読んでいます」（10頁）と記されていたり、『いんふお』に掲載されているクーポン券について、vol.17（2005年6月25日号）「かわらVAN」で「クーポン券も、よく利用させて頂いてます」と記されていることから、相双地域における『いんふお』の重要性がうかがえる。

内容として興味深いのが、特集記事や広告に当時の相双地域で営まれていた店舗、そして、現在では移転・廃業していたり、帰還困難区域であったりする店舗も多く掲載されている点であろう。例えば、『いんふお』vol.17（2005年6月25日号）は「特集 ちょっと保存版 酒を愉しむ」だが、そこに掲載されている店舗で現在でも同じ場所に店舗を構えているのは、不定期営業店も含めて、相馬地区12軒中6軒（「餃子酒房月のうさぎ」など）のみであり、双葉地区6軒中では1軒もない（「和食さかい」は大熊町交流ゾーンで営業）。

『いんふお』には当時の相双地域のファッションについての記事も見られる。例えば、『いんふお』vol.50（2008年4月号）の「Beauty」のコーナーでは「話題の新パーマ「エアウェーブ」」についての記事があるが、2007年に発表された「エアウェーブ」が相双地域でも利用されることとなった。「エアウェーブ」は熱を用いないパーマ機械であり、その自然なふんわりとした仕上がりが多いモデルや芸能人に好まれたことは周知のとおりであろう。以後、『いんふお』の記事の女性に所謂「ゆるふわ」型な髪型が散見される。

『いんふお』以外にも見てみよう。たとえば、日本料理「しのはら」資料において、『いんふお』に次いで多いのは『SUMUSUMU』である。これは有限会社双葉不動産が出版している地域情報誌（ミニコミ誌）で、相双地域の不動産情報に加えて、地域の食・レジャー・イベントなど様々な情報が掲載されている。『いんふお』同様にすでになくなってしまった店舗や施設、運行しなくなったバスの時刻表など、原発事故以前の情報が満載だ。一例を挙げれば、『SUMUSUMU』vol.39（2010年5月号）の「SURF Navi vol.1」に大熊町出身のプロサーファーである山田祥充氏のインタビューが掲載されているが、氏がサーフィンを始めた契機は熊川海水浴場で叔父が監視員をしていたことによると述べている。熊川海水浴場が監視員を設置するほどの海水浴客がおり、サーフィンが行えるほどの海水浴場であったことを示すコメントだが、東日本大震災で津波が襲来し、現在も帰還困難区域のまま防潮堤が築かれ、海水浴場ではなくなってしまったことを踏まえれば、貴重な記録といえよう。

20) 『INFO』vol.10（2004年11月25日号。当時は英字表記）8頁の読者投稿のコーナーである「かわらVAN」で、「相馬出身の為、宮城県の亶理でINFOを見てビックリしました」と記されている。『いんふお』vol.15（2005年4月25日号）12頁には設置店としてフレスコキクチ亶理店が掲載されている。

21) 2023年10月1日検索。なお、大熊町図書館は県内町立図書館で最大の13万冊の蔵書を持っていたが、原子力災害によって休館し、その後、一部蔵書を譲渡、建物が解体されることとなった。

『SUMUSUMU』には、浪江町のいわゆる「ご当地アイドル」NYTS（ナイツ）の記事が多く見られる。NYTSは<sup>22)</sup>、2009年に結成された浪江町のご当地アイドルであり、なみえ焼そばを盛り上げるために浪江町商工会青年部がはじめた企画であり、「NYTSのアイドル修行」というコーナーで、活動や告知記事が掲載されている。現在、NYTSは活動を休止しているが、「ご当地アイドル」の記録は多く遺されるものではないため、地域情報誌（ミニコミ誌）の重要性が指摘できる。

しかし、地域情報誌（ミニコミ誌）が図書館において積極的に蒐集されることは少なく<sup>23)</sup>、まして、アーカイブズ機関においてはなおさらであろう。一方で、冒頭の問題意識に従えば、現在の復興政策が地域コミュニティ再生に結び付いていない、あるいは分断を生んでいる現状において、過去や「思い出」を語ることは、（移住者も含めて）相互理解をする上で不可欠であろう。地域情報誌（ミニコミ誌）は「生活誌」を語る上で、必要な資料であるのではなかろうか。

## おわりに

以下、本稿をまとめてみたい。

本稿は福島県浪江町の日本料理「しのはら」資料を事例として、2つの目録編成の可能性、利活用として「生活誌」への肉迫の可能性を示した。本稿では次の点を明らかにした。

①地域情報誌（ミニコミ誌）の端本主体の資料群であっても、「水染み」を手掛かりにその資料群を活かした編成を可能にした点。当初、端本を巻号順に並べるだけで整理していたが、資料の劣化状態を検証することによって、被災地の店舗に遺されて原発事故を語ることができる資料群として捉え直すことができた。

②①を進めるために聞き取り調査が重要であった点。「水染み」の意味はもちろんだが、日本料理「しのはら」資料は地域情報誌（ミニコミ誌）の端本が多い理由は、飲食店や料理が掲載されているという旧蔵者の評価・選別などの結果であり、聞き取り調査がなかったら事情が分からなかったであろう。

③地域情報誌（ミニコミ誌）を「生活誌」に利用するという点。民俗学・社会学などで、聞き取り調査を重視するように、歴史学にとって人びとの生活を再現するツールのひとつに地域情報誌（ミニコミ誌）が利用できるであろう。日本料理「しのはら」資料の場合、原発事故以前の生活再現の一助となる。

地域情報誌（ミニコミ誌）の端本が多い資料群の場合、自治体などの資料収蔵機関において積極的に保全する意義が求められるかもしれない。当然、「いらない」選択肢もあるべきだが、まずは資料一点一点に向き合う必要がある。日本料理「しのはら」資料の水染みの「いんふお」

22) 『朝日新聞DIGITAL』2011年8月16日（<https://www.asahi.com/special/10005/TKY201108160157.html>。2023年9月15日閲覧）。

23) 近年では、東野善男「図書館資料としてのフリーペーパー論」（『富山短期大学紀要』55、2019年）で述べられているように図書館において地域情報誌（ミニコミ誌）を集める動きが見られる。しかし、その動向が全国的とはいえず、地域情報誌（ミニコミ誌）の前途は暗いといわざるを得ない。

は「生活誌」再現とともに原発事故を語ることができる資料であり、これを糸口に日本料理「しのはら」資料の意義を見出すことができた。

付記：本稿執筆に当たって日本料理「しのはら」女将の篠原美陽子氏に多大なご協力を得た。また、本稿は人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」国文学研究資料館ユニット「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」の成果の一部である。